
拾った白猫

露深

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拾つた白猫

【Zマーク】

N52750

【作者名】

露深

【あらすじ】

拾つた白猫はただの変態猫でした。
でもそんな変態猫を俺は好きで。

白猫は。

俺は大雨が降つてゐる日
気分も優れなかつた。
一匹の猫を拾つた。

それは

そのときは神様しか知らない
運命の出会いだつた。

俺は学校帰り

傘を忘れて走つて帰つていた。

「あああつもー！傘忘れるとか……！」

ん？あれ、猫だよな。

捨て猫か？

「いやあ～」

切なそうにこっちを見て

泣く真っ白な猫。

：ちようどいいか。

俺一人暮らしで寂しいしな。

俺は猫を抱き上げてまた走り出した。

ガチャツ、バタン

「どうあえず……体拭いてやるか。」

俺は洗面所に行つて猫を拭く為のタオルを持つて猫を拭いた。

「いやおつ……！ いて……」

……え。

今喋ったか？

「あ。……猫が喋るなんて氣持ち悪いだろ？ なれてるから、捨てていいぞ。」

そりゃあ、驚いたけど……。
捨てるわけない。

「捨てるわけないだろ？」

逆に誇りに思つよ。喋る猫なんて。」

「……そんな風に言われたの、初めてだ。
じゃあこれでさしあげられる？」

ボンツ

え……。

俺が抱いていた猫は猫じゃなく
一人の美少年だった。

「これでも俺を捨てない……？」

その少年の顔は切なそうだった。

「…ああ、言えるよ？…とつあえず…名前は？」

「…っ…俺は…浪合白。よろしくね…！」

「俺は小波大河…よろしくな、ハク！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5275o/>

拾った白猫

2010年10月26日21時12分発行